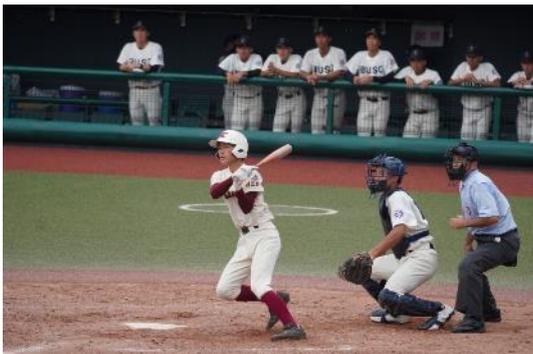


100だしきったら、次の100が湧いてくる。

2023年7月14日 全国高校野球選手権 神奈川県大会で金井高校野球部は3回戦に進出していた。その日の早朝、練習グラウンドでは、笑顔でバッティング練習をする選手達が出た。部室を見ると、道具は整理され、ゴミひとつなく隅々まで清掃されており、これまでとは見違えるほどに綺麗になっていた。3回戦の会場は、等々力球場。いよいよ球場に選手が入っていく時、応援に駆けつけてくれた吹奏楽部、チア部、ダンス部、合唱部の各部長とベンチメンバー、ベンチに入れなかった選手、マネージャーと大きな円陣が組まれ始めた。力強く肩を組み、大きな声で自分の想いを言葉にしていく選手達、それに応じるように大きなかけ声を周りは返す。大きな声の渦とともにチームの輪は広がっていった。相手は強豪私学の武相高校。全力で立ち向かっていったが、力及ばずに彼らの夏は終わった。チームの目標は、3回戦進出、応援されるチーム、勝ちを目指すチーム……応援されるチームって何？何のために毎日、泥だらけになりながら、白球を追いかけていたのか。野球が好きだから……それだけで続けられるほど楽ではない。それでも努力を続けた。その答えが高校野球最後になる今日、ほんの少しだけ、分かった気がした……。



2022年9月、金井高校は秋季県大会2回戦、強豪私学の星槎国際高校を相手に7回まで0-1と強豪相手に一歩も引かない戦いを見せていた。ただ、疲れからか気を許した瞬間、追加点を許してしまった。その後、緊張の糸が途切れ、失策を起こす。一気に試合をもっていかれた。敗戦によって、涙をするほど悔しがる選手、自信を手にした選手と俺らだってできるんだという可能性の光が芽生え始めた。

県大会を終え、学校生活が始まる。金井高校野球部は平日、学校の目の前にある住友電工さんのグラウンドを借りて練習している。ただ、コロナ禍でグラウンドは使用できない状態が続いたため、腰まで伸びた草が生い茂り、荒れ放題となっていた。選手達は雑草を抜き、土を搬入し整備を続けた。いったい何部なのかと選手達も心が折れそうになっていた。それでも、グラウンド整備と練習を並行して活動を続けていた。しかし、そのサイクルの中で目標を失いかけ、できていたことが、気づかない内に1つずつ抜け落ちていく。練習試合の雰囲気も大会の時とは、随分と変わっていった。上手いことできないことに苛立ちを見せる。審判の判定や相手チームへのリスペクトの無い表現が少しずつ出てきた。このままでいいのか……。選手同士、選手達と指導者達との間にも溝が生まれていった。ついに、ある練習試合で自分でも感情を抑えきれなくなった選手の行動に周りの選手も言葉を失った。チームは最悪の雰囲気となり惨敗してしまった。こんなチームは応援されるチームではない。チームになっていない。多くの選手がそう感じている。でも言葉にする勇気がない。行動に移す覚悟もない。でも、このまま終わりにたくない。そんな想いから、チームは落ち着いて、それぞれが自分の想いを言葉にするミーティングを行った。言葉を発することができると心が軽くなり、自分のやりたいことがシンプルになってくる。もう

一度頑張ろうと思えるようにチームはなっていた。その後の練習試合から感情をコントロールできなくなりそうな選手に声かけられる。1人が言葉を発すると周りもフォローしていく。その選手も笑って、自分を取り戻す。少しずつだが変わっていきたいという想いが形になってきた。



11月、グラウンドはすっかりと野球場となっていた。そんな中、月刊チャージ神奈川版という野球雑誌の記者が金井高校野球部のグラウンドに取材に来てくれた。取材を終えた記者は、チームで戦術の意図を共有しながら、みんなで勝とうとする野球をしていると話してくださった。注目されることで自分達の行動や取り組みを丁寧に見直す機会となった。さらに金井高校野球部OBでMLBドジャースのメディカルトレーナーで活躍されている方からOB会を通して、選手達、1人ずつにアップシューズが寄贈された。たくさんの人が支援してくれていること、応援してくれていることを実感できる出来事が続いた。オフシーズンに入っていき、苦しいトレーニングを行う期間を迎えるにあたって、選手達は、さらにもう一段、努力する覚悟を決めた。

12月、オフシーズンに入り、トレーニングの時間が増えていった。毎日、体に疲労感が残る。頑張った先に何かがあるのか、ただ、その日から逃げたい。どうやってトレーニングを楽にするかを考え、こなすだけ…。そんな未来を生きることができなくなったチームには、離れようとする選手が出てくる。ただ、チームからはなれても、今度はチームが声をかける。一緒にもう少し頑張ろうと…。必要とされていることを自覚する。そして、覚悟を重ねた過去が、すぐにあきらめてしまう自分を許せなくなっていく。そんな自分との対話が意志となり、最後までやり遂げたいとチームに戻ってくる。そんな期間となっていた。それと同時にたくさんの紅白戦やゲーム性が高い練習を数多く行った。ゲームに対するスピード感とゲーム感覚を養うためだ。また、他校との合同練習を経て、高校野球をやる同志がいることを肌で感じた。どのチームでも様々な葛藤と戦っているんだと知るだけで活力となった。



3月、春季大会の地区予選、磯子工業高、横浜商大高と1勝1敗で迎えた3戦目。相手は瀬谷高校。練習試合や合同練習をした経験のあるチームとの試合だった。お互いに知っているライバルだ。さらに勝った方が県大会出場のかかった試合。絶対に負けたくないとお互いに集中力が上がっていく。ベンチも相手への圧力や称賛の両方の声が飛び交っていた。試合が楽しい…。そんな感覚がチーム全員にあった。自分の役割を果たそうとすることに集中していく、チームが1つになっていく。その繋がりが楽しいと彼らの表情が物語っていた。ついに8回、その均衡を力で破ってみせた。オフシーズンを乗り越え、自分たちの成果を噛みしめることができた試合となった。

4月を迎え、9名の新入生が入部を決めてくれた。新しい後輩ができ、気がつく、選手達は、身体も心も随分とたくましくなっていた。朝練を自主的に行う選手の数も増えていた。朝7時半には、10名以上の選手が毎日、練習を始めている。県大会1回戦、相手は麻溝台高。序盤から相手のペースにのまれ、力負けしてしまった。それでも、彼らの気持ちは折れることはなく、夏の大会にむけて、闘志を燃やしていた。もう秋の弱かった頃の彼らは、そこにはいなかった。

6月、週末になると練習試合の日々の中、夏の大会の抽選が行われ、対戦相手が決まる。背番号も発表され、保護者会は壮行会を開いてくれた。そこでマネージャーから千羽鶴とお守りが手渡され、それに応えるように選手達は大会にむけて、意志表明を堂々と発していた。さらに吹奏楽部、チア部、ダンス部、合唱部で結成された応援団からも壮行会を開いてもらい、エールを受け、生徒同士の絆の輪が広がっていく。4年ぶりの観客の制限人数の撤廃でたくさんの人達が応援に来てくれることになった。



7月11日、3年生にとって最後の大会がはじまった。相手は大和東高校。試合前、応援団や保護者にチーム全員で挨拶をし、みんなの前で選手達は円陣を組んだ。初戦で緊張して自分達の普段の音が出せなかった。試合がはじまり、生き活きた動きは見せるものの、どこかしっくりときていない様子だった。試合の序盤は我慢の連続だった。緊張と暑さで脚がつる選手が互いのチームからでてきた。敵チームだとか関係なく、お互いのベンチから水分と氷を運ぶ選手達、動けるようになったら、拍手で称える。3年生の最後の大会だからこそ、お互いに全力で野球をやろうという想いが伝わってくる光景だった。試合は我慢強く攻撃を重ねた結果、コールドで勝利することができた。試合が終わっても、夏の大会での応援の迫力や周りの声援、そんな舞台で野球ができる喜びに興奮していた。新チーム当初に掲げた目標は3回戦進出だった。気づくと、あっという間に目標を達成していた。選手達は目標を達成したことに歓喜を上げるというより、ホッとした安堵の表情を浮かべていた。目標達成の満足感にひたることはなく、欲が出てくる。自信を得ることはできたが、自分たちが目指すものを言葉にして意志を表現できれば、もっと違う世界を体感できるかもしれない。そんな想いが溢れていた。3回戦を前にして、自分達を見つめ直し始めた。試合前の気持ちの上げ方を工夫するために円陣の組み方、声のかけ方から考えはじめた。野球の技術練習はもちろん、その前の準備からが大切だと気付いたからだ。つながりの強さがチームを強くする。選手だけではなく、ベンチに入れなかった選手、マネージャ、そして、応援団とその広がりが必要だった。試合前日、自主練習とともに部室や校内を掃除していた。試合当日の朝、部室はきれいに整理されていた。グラウンドでは自主的に汗を流している選手達の姿があった。そして、試合前の円陣の輪に応援団も加わり、大きな円陣となっていた。言葉も強くはっきりと頼もしい声がこだましていた。自分達で試合や会場の雰囲気をつくっていく。やることは全てやりきって、試合に望む。これこそチームと呼べる集団となっていた。試合は、必ず勝敗が決まるものなので、残念だったが、3年生の最後の試合で、応援される最高のチームになったことに誇りをもってもらいたい。彼らは、まさにチームで目標に向かって努力を重ねていく素晴らしさを学んだのだ。きっと、その頼もしい背中には次の金井高校野球部の大きな力となり、彼らの人生の生き方の糧となることだろう。

